〇安田 厚子 氏（平成 13 年、夫（当時 35 歳）を交通事故で失う）

［要旨］

事故の概要

平成 13 年８月 23 日、夫(当時 35 歳)は大型トラックによる玉突き事故に巻き込まれ、亡くなりました。事故発生の報を受け、無事を祈って病院へ駆けつけ、夫の惨い姿を目の当たりにしたあの瞬間、平穏だった毎日が修羅場と化しました。思い出すだけで何年経っても身震いします。

事故が起きた東名阪自動車道鈴鹿料金所付近では、台風一過の路面工事の影響で８㎞ の渋滞が続いていました。仕事で移動中だった夫は、渋滞の後ろから２台目に停まっていて、そこに脇見運転の 15t トラックが猛スピードで追突しました。その破壊力は絶大で、最後尾の車を 30m飛ばし、夫の車に追突。次々と７台が玉突きになり９名が負傷。夫は車ごとトラックの下敷きになって即死しました。

事故の翌日、私たちは家族旅行を予定していました。テレビを見ながら旅行の準備をしていると、「東名阪で玉突き事故発生、男性１名死亡」というテロップが流れました。私は「お気の毒に、私たちも気を付けないと」と思ったものの、息子を水泳教室に送る時間になり、家を出ました。帰宅すると留守番電話に、夫が事故に遭い救急車で運ばれたという伝言が身内たちから動転した声で入っていました。膝が震えました。

私は実家の車で搬送先の病院へ急ぎました。事故による渋滞が延々と続き、やっとの思いで病院に駆け込むと、待っていたのは包帯と寝間着にくるまれた夫。御遺体と呼ばれる姿でした。「まさか」「どうか無事で」のみだった私は、その姿を見るや発狂しました。あのニュースは、まさに夫が亡くなった事故の報道だったのです。息子は、「うそやろ？ お父さんを助けて」と医師や看護師にすがりつきました。私さえ医師の話が頭に入ってきません。小学２年生（７歳）の子にとっては尚の事と思います。愕然としたまま夫を連れ帰り、通夜、告別式に追われることになりました。これが果たして現実なのか。こんなに早く、こんなに突然、夫を見送りたくない、喪主なんてやりたくないと暴れ狂いそうでした。でも弔問の人が続々と来訪する中、私が錯乱して夫に恥をかかせてはいけないと思ったのを記憶しています。傍目には気丈に映っていたそうですが、実際は気絶寸前で葬儀中の記憶は、あやふやです。

まだ何も分からない２歳の娘は、「父ちゃん、ねんね？」と物言えぬ父親に話し掛け、息子は泣き疲れ、冷たくなった父親にしがみついたまま夜を明かしました。

葬儀中、私の横に立って弔問の人に頭を下げ続けていた息子が、いざ荼毘にふす時、豹変しました。「嫌や！ お父さん、お父さん！」と棺に向かって駆け出したのです。息子の叫びは残酷この上ない死別を象徴しているようでした。私と子供たちは、夫の冷たい手を包み、「これからも、ずっと一緒にいてね」という言葉しかかけられず、「さようなら」を言いたくないまま永遠の別れになりました。

葬儀後の毎日

本格的な悲しみは、葬儀を終えてからの毎日でした。新聞やテレビでしか知らなかった死亡事故、引き裂かれた悲しみは強烈でした。時間が止まりました。夫が忽然と消され、こんな夢、早く覚めてと願う毎日。普通に考えると片親で子育てする事が最も大変と思われがちですが違います。まず夫が亡くなった事実を受け入れることができませんでした。我家はごく平凡な家庭でしたが、家族揃った当たり前の毎日が、どれだけ幸せだったかを思い知るばかり。受け入れがたい現実と向き合いながら、香典整理、名義変更などの手続に追われ、夫の存在が抹消されていく中、死別が現実味を帯びていき、喪失感は薄れるどころか日に日に気が狂わんばかりになりました。

その頃、心の中には二人の私がいた気がします。片方は遺された妻、もう片方は遺された子の母親としての私です。真逆でした。妻としては打ちのめされてボロボロ。スーパーに買い物に行くのも苦痛でした。どこに行っても家族連れに目が行って、赤ちゃんを抱くお父さん、小さい子と手を繋ぐお父さん、少し前まで我が家も同じだった光景に、息苦しいほどの悲しみが襲いました。涙が止まらなくなり、何も買えずに帰ったのは一度や二度ではありません。その度に「子供にご飯」と思い直して店に戻ったものです。そんな私を奮起させてくれたのは子供たちでした。

息子は父親に溺愛されて育ち、お風呂も寝るのもお父さんと一緒のお父さん子でした。２学期が始まってから不思議なほど涙を見せなくなりましたが、事故から１か月余り経った夜、夫の車の中で一人で泣いているのを見かけました。その日は息子の誕生日。息子は「今日こそ帰ってくると思った」と泣きました。泣くのを我慢していたようです。私は、抱きしめて一緒に泣くことしかできませんでした。

私は眠れない夜が続いていましたが、息子はその事に気付いていたようです。ある朝、私は寝坊してしまい、起きた時には息子は家を出た後でした。キッチンには息子が朝食用に餅を焼いた形跡があり、私は慌てて息子を追いかけました。「ごめん、叩き起こしてよ」と言うと、息子は「お母さんが寝てくれた。ゆっくり寝てほしかったから」と言って歩いていきました。息子の悲しさ淋しさこそ生半可じゃないだろうに、こんな気を遣わせていたのだと、ランドセルの小さな後姿が不憫でなりませんでした。

娘は死別の意味が分からず、玄関のチャイムが鳴ると「父ちゃんおかえり」と駆け出しては、扉を開ける度に父親が帰らないのを不思議がり「父ちゃん帰らへん」と呟きました。２歳というと歌を覚える頃だと思いますが、娘は歌より先にお経を覚えてしまいました。決して娘が賢いわけではなく、仏間にいる時間が多くなった私のお経を聞くうちに、自然と暗記してしまったのです。私は目が覚めていきました。文字も読めず歌もまともに歌えない娘が鼻歌みたいに口ずさむお経と、一人で歯をくいしばって泣く息子、子供たちの姿は私を正気に戻す薬になりました。歌も聴かせず、本も読んで上げられず、話を聞いてやることもできず、寝坊までして、今、思えば子供にとって父親を失ったと同時に、母親まで失ったのも同然だったでしょう。夫はどんな思いで遺した子を見ていたか。悲しみに暮れる不甲斐ない私をどう思うか。夫はいつも子供と風呂に入るのを楽しみに帰り、「子供の成長が楽しみ」と一緒に泥んこになって遊ぶ人でした。子煩悩な夫は死んでも死にきれないでしょうし、私

に「子供らを頼む」と願っているでしょう。誰よりつらいのは夫です。想像を絶する痛みを受け、幼子を遺して命を絶たれた無念を思う程、私は這ってでも立ち上がり、この先、何があろうと精一杯にお母さんをしよう、その一心で我に返っていきました。しっかりするんだと。

遠路の刑事裁判

死別の悲しみに加え、被害者には加害者側と向き合うストレスが加わります。事故から半年後、加害者が起訴され、刑事裁判は加害者が住む鹿児島で開かれました。事故直後に謝罪に来たきり音沙汰がない相手に怒りはあったものの、当時は生きるのに必死で裁判どころではありませんでした。何より気掛かりだったのは子供です。父親を失った上に母親まで裁判で留守にし、これ以上、淋しい思いをさせて良いのか迷いました。でも初公判の数日前になって加害者が不意に来て、上司の人の「飲酒運転した訳じゃない、ほんの不注意。償いより会社の存続で頭が一杯です」という言葉に、私は裁判に行く決意をしました。奪った命をどう思っているのか。そもそも何故こんな事故になったのか、事故の一部始終を知りたい。何より加害者に、命の重みと、命を奪う罪の重みを、真摯に受け止めてほしい。「反省と償い」への願いが込み上げたのです。息子が私に言いました「裁判に行って。僕は学校がある。あの時、何があったか、僕の代わりに聞いてきて、ちゃんと話してきて」と。まるで背中を押されたようでした。法律に無知な私でしたが、検察官に相談したり、証言台に立ち私なりに被害者の思いを裁判官に伝えました。加害者の曖昧な証言や態度、控訴審にまで至ったことなど悔しい思いを何度もしつつ、最後まで見届ける決意で遠路６回、三重と九州を往復しました。高等裁判所で禁固一年半の判決後、裁判長が加害者に言いました。「あなたは一年半たてば家族に会える。被害者は一生、会えない。元に戻れない。違いが分かりますか？ 心から反省し、交通刑務所で命の重みを学んでいらっしゃい」と。事故現場も被害者も三重でありながら、遠路出向いた刑事裁判は苛酷でしたが、裁判長の血の通った言葉は、刑事裁判における唯一の救いだったと思います。後に民事裁判も終わり、今や加害者からの連絡はありませんが、私は加害者に神経を使うより、夫が何を望んでいるかを一番に考えたいと思うようになりました。

夫は即死でしたが、心に響く言葉を２つ遺してくれました。

事故の２時間前、携帯電話の夫と話をし、旅行に浮かれる私を茶化すように、夫は「明日が楽しみやな」と笑い交じりに電話を切りました。事故前夜には息子と野球盤で遊び、「続きは明日な」と約束しました。「明日」これが夫が遺した最期の言葉です。

夫が常々口にした「子供の成長が楽しみ」そして「明日が楽しみ」。この２つは、明るく前向きな夫らしい「遺言」です。子供の成長を夫に喜んでもらうこと、誰も明日を奪われないよう、命の尊さを伝えること、そして生かされている感謝を胸に生きるのが、何よりの供養と思えるようになりました。大事な選択肢で迷った時、夫ならどう望むだろうと想像しては、夫を時に身近に感じ時に仰ぎ見

ながら、一歩一歩、進んで来れたように思います。

子供たちの思い

父親の思い出だらけの息子と、父親の記憶がない娘とは、同じ痛みではない事に気付かされます。娘は折に触れ「お父さんはどんな声？ 背は高いの？」などと聞いてきて、その都度、在りし日の夫を語り聞かせてきましたが「お父さんを覚えていたかった」の言葉に胸を打たれました。また、「お父さんが亡くなって、お兄ちゃんはどんなに悲しかったか。私は何も知らずに大きくなって悪い気がする」と言ったこともあります。息子は始めから強烈な打撃を受けている一方、娘は育っていくにつれ父親との死別をじわじわと理解していく中で、つらかっただろうと気付かされました。

娘が保育園で作った父の日のプレゼントに、「お兄ちゃん、ありがとう」と先生の字で書かれてありました。先生は、「お父さんが亡くなられているので可哀相で」と仰いました。“お兄ちゃんをお父さんの代わりにするのは酷。お父さんが始めからいないことになっている方が可哀相”と内心思いましたが、保護者に遠慮して聞くに聞けなかったのだろうと察し、対応に悩まれたら何でもお尋ねくださいとお願いし、お父さんは心の中で生きているので、今後は、お父さんへのプレゼントとして作らせてやってくださいと伝えました。その後、娘は父の日の工作を作る度に、「私にはお父さんがいると思えた。お父さんはどんな顔で喜ぶかなと思いながら写真を眺めた」と今になって話してくれます。

息子は悲しみを殆ど口にしませんでしたが、ここぞという時、傷を露わに見せました。事故から２年経った時、道徳の授業で見た入学式のビデオに偶然、夫が映っていたそうで、滅多に泣かなくなった息子が、「お父さんや」と呟いて涙を流したそうです。授業後、先生が「ごめんな、お父さんが映っていたとは。つらい思いをさせて悪かった」と声を掛けると、息子は「大丈夫」と元気に走って行ったそうです。この件を息子は私に何も言わず、後で先生から聞いて驚きました。普段、学校で元気な息子が無言で涙する姿に、先生は「事故から２年。元気にしているので立ち直ってくれたと思っていたが、まだこんなにつらかったのか」と驚かれていました。息子が泣いたことを先生は謝ってくださいましたが、むしろ私は感謝しました。傷に蓋をしている子供の痛みに対し、私は鈍感だったと知ることができたのです。後で私は、「泣いたのは恥ずかしいことじゃない」と慰めたつもりでしだが、息子は「泣いてへん。先生の見間違いや」と泣いたことを認めませんでした。先生は「泣かなかったことにしてやってください。頑張ろうとしています」と仰ってくれました。息子にしてみれば、葬儀で周りの大人が「男は泣いたらあかん。男の子やから、お母さんと妹を助けていくんや」と言われたことが心に引っ掛かっていたのかもしれません。

息子が成人になった時、あの時、先生がこんなことを言ったと教えてくれました。「これからつらいことや悔しいこと、一杯あるかも知れんけど、何でも先生に言うてくれよ」と。結局、先生につら

いことを打ち明けることなく卒業したそうですが、あの時「側で気にかけてくれる先生がいる、俺はこの先生が担任で良かったと思った」と言いました。

息子が中２の時。父親の七回忌法要と修学旅行が重なりました。息子は家に帰るなり「オレいかん。命日と重なった。もう先生には言うた」と平然と言って部屋へ駆け上がって行きました。いつもなら遠足や修学旅行では、いそいそと準備する子が。担任の先生から電話があり、息子は旅行の説明会後、即座に職員室で不参加を申し出たそうです。先生は、「お父さんの話を聞いたのは初めて。そういうことを一切、言わない子。明るく友達も多く、元気すぎるくらいの子が」と、法事と重なるから参加できないと毅然と言い切るギャップに驚かれていました。反抗期が始まった頃でもあり、独断で不参加を決めた息子に私は、「何でお母さんに相談せんと断ったん？ お父さんなら『修学旅行に行け。ええ経験してこい』って言うよ」と言いました。すると息子は「分っとる。お父さんのことは気にすんな、修学旅行を楽しんで来いって言うはず。だからこそお父さんを優先したい。普段は学校あって、お父さんを片隅に置いてる。命日くらいお父さんのことだけ考えてもええやん」と倍返しされました。先生は「参加、不参加を決める前に、まず話をじっくり聴きたい。教師として生徒の心と向き合う大事な機会」と、息子と何度も話し合う時間を作ってくださいました。結局、命日は大事だと息子は揺るがず、先生は「お父さんを最優先にしたい子供の気持ちと、修学旅行を経験させてやりたい親の気持ち、両方を叶えたい」と、法事を終えた後から途中参加させていただくことになりました。学校側にとっては大変な配慮だったと思います。こうした学校での出来事に息子の傷を再認識したと同時に、小中学校とも先生が生徒の痛みに対して親身で真剣で、ただ感謝ばかりです。

息子が大学生の時、駅に迎えに行った帰り道、猫が車に撥ねられ血だらけで横たわっていました。私が瀕死の猫を横目に車の流れに任せて通り過ぎると、息子が激怒し、「戻れ！ 生きとるやん！助けなあかんやろ！」と怒鳴りつけました。夜更けに病院を開けてもらい、猫は手術と入院を経て一命をとりとめました。息子が作ったチラシで見つかった飼主は、命あっての再会を泣いて喜んでいました。病院への道中、どうせ助からないと尻込みする私に息子が言いました。「死ぬにしても誰かが看取ってやるもんや。アスファルトの上で死なせたくない」と。事故から間もない頃、息子は警察署に掲げられた看板の「死亡事故１」の数字を見上げ、「この１が大きいんや。減らすというよりゼロにしたい」と言いました。大事な原点は小さい頃から何も変わっていませんでした。今なお残る心の傷を知ったと共に、その痛み故に、小さな命を救ったのだと思います。

子育てを振り返って～ご支援への感謝

親を失った悲しみを、子供は小さい体で一身に受けます。その痛みを、子供は大人ほど言葉で表現できない上、必死の親に気を遣い、心に閉じ込める部分があるだろう。いっぱい我慢しただろう。その心を私はどこまで理解し、受け止めて来れたか自信がありません。事故後、私は仕事を始め、寂し

い思いもさせたと思います。一人親という気負いもあり、優しいよりも厳しい母親だったかもしれません。夫を失ってから、愛情よりも責任感が先走っていた反省が多々あります。子供を叱る時、つい「お父さんなら、どう思うと思う？」と言うのが口癖でしたが、子供はどう思っているかを一番に考えるべきで、一人親だからこそ一層の愛情と笑顔が大切だったと省みます。

こんな私が今まで歩んで来れたのは、多くの支援との出会いに恵まれてきたおかげです。

「ありがとう」と感謝する度に心が穏やかになり、私は育児に欠かせない笑顔を取り戻すことができました。子供たちは夢を見つけることができました。どの支援団体も、涙が力に変わる温かい場所で、感謝したい人や見習いたい人がたくさんいます。

東海交通遺児を励ます会では、クリスマス会やバス旅行、カヌー合宿等へ招待されました。親同士が語り合う機会もあり、子供たちが高校を卒業するまで、親子共々お世話になりました。出会いのきっかけは、事故から数か月頃、“この苦しみが分かる人に出会えたら”と思い、電話をしたことでした。電話対応をされた事務員も交通遺児家庭で、小学生の息子２人を育てた母親でした。「これ以上、頑張らないでください。生きているだけで頑張っている。泣いてください。もう１日、もう１日生きてください。私も、もう１日と 17 年生きてきました」と懸命の涙声で受け止めてくださいました。まるで地獄まで下りて来て手を取ってもらったようでした。涙が溢れ「必ず頑張れる」と心から思えました。この電話は、歩きだす原点になりました。

NASVA にもお世話になりました。三重支所の相談員から、「私は事故で家族を失った悲しみを知らず申し訳ない。私が相談員で大丈夫なのかと思いながら、皆さんと過ごさせていただいています」と打ち明けられました。私は「そのお気持ちが嬉しいです」と答えました。理解しようと想像を巡らせながら、寄り添ってくれているのでしょう。毎年、バス旅行を子供たちは指折り数えて待ち、楽しんだ思い出が懐かしいです。

交通遺児育英会は、「学費」という何よりの面で心強い支えです。おかげで子供たちは 、行きたい道を歩んでいます。息子は今、大学院で研究に励み、娘は大学入学と同時に育英会の寮に入り、安心できる環境のもと大学生活を謳歌しています。育英会の援助で自動車学校に通っており、自分の命と周りの命を大事に運転すると免許取得に向けて奮闘中です。二人共バイトをしていますが、育英会の力添えがなければ、娘まで遠い大学にやることはできませんでした。感謝で頭が下がるばかりです。

そして昨年度、私が引き継いだ三重県交通遺児を励ます会は、追悼会や餅つき大会など、娘の高校卒業まで、我家もお世話になる側でした。また交通遺児を増やしたくない願いから、三重県の交通安全週間に合わせて年４回、街頭でチラシを配る活動も実施しています。素朴な雰囲気の会で、集まる度に「大きくなったね、元気やった？」の声が飛び交い、親同士も生活相談、子育て相談、進学相談にまで話題が発展するのも同じ境遇ならでは。同じ境遇の一人として、支えられてきた一人として、今まさに渦中にいる交通遺児が喜ぶよう、寄り添うことが、微力ながら、せめてもの恩返しだと感じています。少人数のささやかな会ですが、つきたての餅を美味しそうに頬張る子供たちや、大人に交

じってチラシ配りを頑張る姿、そんな子供たちの成長と笑顔に、私が逆に励まされています。

傷ついた子供の支援と共に、危機的な心的状況で子育てする一人親へのケアも不可欠で、それに救われたと実感する今、早期支援、継続的支援の大切さが身に沁みます。

支援には、大きく分けて法的支援、経済的支援、心の支援がありますが、心の支援は最も難しいと感じます。人によって痛点が違い、その痛みは百人いれば百通りあります。事故で一人親になった家庭、そこだけが大きな共通点で、他は全て事故態様も家族状況も、悲しみ方も乗り越え方も千差万別です。これは交通事故遺族の仲間と交流する中で気付かされました。最初は「同じ」に救われました。そして皆が「違う」と知って勉強になりました。他の人が救われた言葉が私にはつらいこともあれば、逆に私が救われた言葉が他の人にとっては嫌かも知れません。良かれと思った言動が、逆なでになりかねないのが心の支援の難しさであり怖さだと感じます。また、同じ人でも年月の経過によってニーズは変わります。それぞれの遺族が今、何に困っているか、何をしてほしいかを最大限に汲みとった上で、その人に応じた対応を探りながら答えを見つけていくのが、難しいですが大切と思います。

支援がくまなく届くよう

「交通遺児の支援がいろいろあることを知らなかった、もっと早く知れば良かった」という保護者の声を聞くことがあり、支援の存在を知らないまま孤立している遺児家庭や、団体名は知っていても一人親家庭になった警戒心から、入会を躊躇されたご家庭もあります。遺児家庭にとって孤立と情報不足は苦難に拍車をかけます。大人以上に子供は自ら支援団体に辿り着くのは難しく、遺児の情報を待つのではなく、支援する側から情報発信を手掛け、孤軍奮闘している遺児家庭に支援のきっかけが必要と感じます。私も今、支える側に回る立場ですが、今でも周りや支援に支えられているという感謝を胸に、微力ながら活動を続けていきたいと思っています。